

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 （ 教育学 ）	氏名	山崎 茜
学位授与の要件	学位規則第4条第①・2項該当		
論 文 題 目			
思春期女子の友人関係に関する研究			
論文審査担当者			
主 査	教授	栗原 慎二	
審査委員	教授	井上 弥	
審査委員	教授	岡 直樹	
審査委員	教授	林 孝	
〔論文審査の要旨〕			
<p>本論文は、いじめや不登校等と関連が深く、その発達の様相を明らかにすることの必要性が指摘されながらも、実証的には十分に検討されてこなかった思春期女子の友人関係に焦点を当て検討したものである。特に、思春期女子の友人関係が閉鎖的で排他的になりやすく、いじめや不登校等の問題につながりやすいことに着目し、その閉鎖的で排他的な友人関係の背景とその発達の变化の一部を実証的に検討している。</p> <p>本論文は5つの章から構成されている。</p> <p>第1章では、児童期から青年期にかけての友人関係に関する先行研究を概観し、思春期女子の友人関係を検討することの必要性を指摘している。これまでの友人関係研究では男女ともに gang-group から chum-group へ、そして peer-group へという発達の变化をたどるとされてきたが、本研究では男女でそれぞれの段階での様相の内実は異なることを指摘している。その上で、特に学校現場において友人関係の問題が起りやすい中学生女子を対象に、chum-group から peer-group への移行に必要と考えられる同調性の低減に関連する要因を検討することが目的として設定されている。</p> <p>第2章では、思春期女子に特有な閉鎖的で排他的な友人関係の背景となる要因を明らかにし、実証的研究のための仮説生成を行っている。本章で生成されている仮説は以下の3つになる。</p> <p>① chum-group から peer-group への移行において、同調性の低減には友人関係における不安の解消と他者への尊敬、異質性や独立性の希求が高まることが関連する。</p> <p>② chum-group から peer-group への移行には友人を愛着対象とし、内面の類似性の確認を通じた親密性の経験をすることも関連する。</p> <p>③ chum-group には親密性を満たすポジティブな機能と、同調性につながるネガティブな機能がある。</p> <p>第3章では、中学生女子の友人関係について、第2章で示唆された同調性の低減に関連する要因が友人関係行動にどう影響するのかを実証的に検討している（研究1）。レビューで得られた知見に基づき、実際に中学生の女子を対象に友人関係の外的側面である友人関係行動と、内的側面である友人への考え・思いとの関連が検討され、その結果、中学生女</p>			

子の友人関係に、chum-groupのポジティブな機能と、ネガティブな機能があることを示唆している。一方で研究1では発達的变化を検討していないことから、この2つの機能が友人関係の発達的变化に与える影響を検討するために学年間の比較などの発達の検討を行う必要性が指摘されている。

第4章では、これまで詳細な発達的变化が検討されてこなかった中学生女子の友人関係について、友人関係行動と友人への態度について、学年を要因として検討し、詳細な検討を試みている(研究2)。中学生女子の友人関係における友人関係行動、友人への考え・思いの発達の相違を、学年を要因として検討し、思春期女子の持つ同調性の低減に関連する要因の実証的な検討を試みている。その結果、中学校では3年生が最もpeer-groupの特徴を示す友人との活動が見られ、友人関係から排他されることへの不安が他学年と比較して有意に低いなど、発達の差違の一側面が見られている。一方で、友人関係の発達を促進すると考えられていた友人尊重や独立性の希求、異質性の受容については、発達の高くなるというような明確な結果は得られていなかった。

研究1、研究2で得られた一連の結果から、思春期女子の友人関係において、不安が解消、あるいは低減することが友人関係を成熟した関係へと進める可能性がされている。また、これまでひとくくりにchum-groupとして捉えられていた思春期女子の友人関係について、親密性を満たして発達を促すというポジティブな機能と、同調性を生じさせ発達を妨げるネガティブな機能があることが新たな知見として示されている。

第5章では、本研究の課題として、排他不安や友人分離不安の低減にはどのような要因が影響しているのかという点までは十分に検討できておらず、今後の研究では、内面までもpeer-groupに至っているものとの比較研究やこのような不安の低減に効果的な教育プログラムの実践効果検証等を通して、排他不安や友人分離不安の低減に関する影響を明らかにすることが求められていると示されている。

本論文は以下の点で評価できる。

第1に、これまで学校現場では友人関係上の問題が多く起こることやその介入の困難さが指摘されており、実証的研究の必要性はありながらも十分な検討が進んでこなかった思春期女子の友人関係について、友人関係における行動とその背景にある友人への態度が明らかになったことである。これにより、学校現場で思春期女子の友人関係に起こる問題への介入を考慮する際の一助となる知見が得られた。

第2に、これまで関連性が十分に整理されておらず各研究で知見が整理されないまま研究されていた女子の友人関係における親密性と同調性、閉鎖性、排他性について先行研究の知見を整理し、親密性と閉鎖性が、同調性と排他性が表裏一体であるという新たな知見を得られていることである。これにより、女子の友人関係の複雑な様相を理解する上での基礎的な知見が得られたといえる。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士(教育学)の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

平成28年2月17日